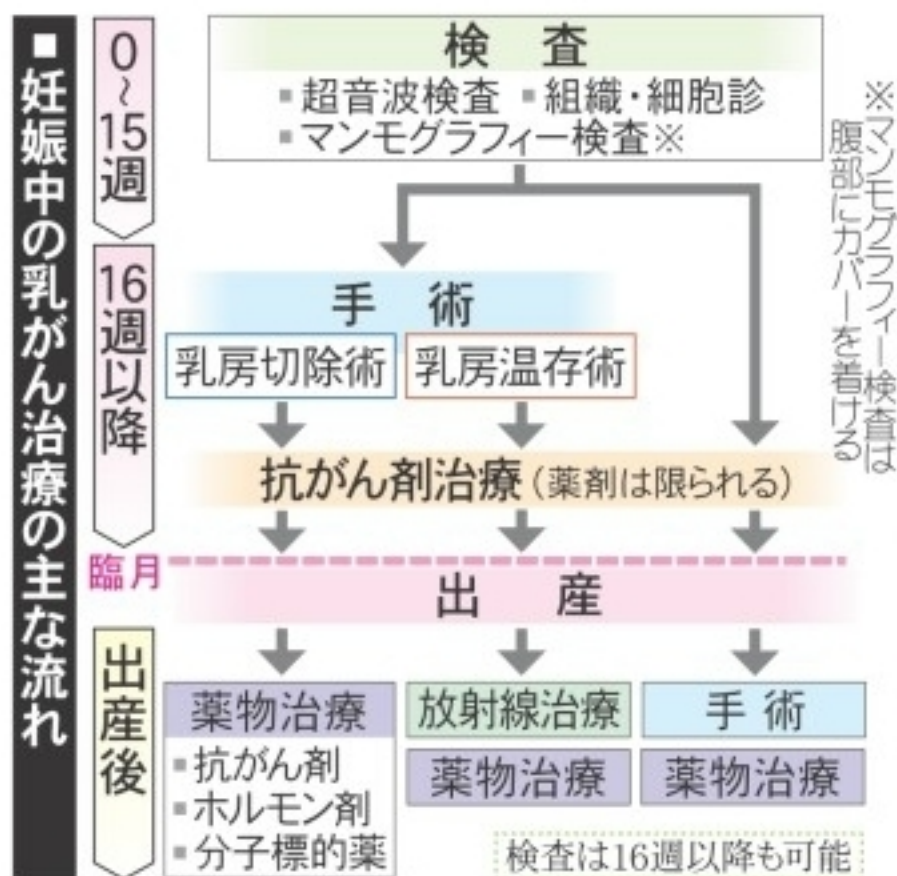


新

ひよごぶの医療

シリーズ4 がん診療最前線④ 乳がん<下>



妊娠中期から抗がん剤

治療と出産の両立



佐古田洋子 部長

妊娠中の乳がん治療で最も注意が必要なのは、妊娠前期

「乳がんだからといって、出産できなくなるわけではない」。兵庫県立加古川医療センターの検査・放射線部長兼乳腺外科部長、佐古田洋子さん(61)は強調する。

治療前の検査では、放射線被ばくにつながるエックス線やコンピュータ断層撮影(CT)は行わない。磁気共鳴画像装置(MRI)も、胎児に影響する恐れがあることから使用を避けている。超音波(エコー)検査に加え、組織や細胞を採取することで、がんの状態を調べることは十分に可能という。

双方の変化に対応

将来に備え卵子など凍結保存

(妊娠15週まで)の胎児への影響。さまざまな器官ができる時期で、放射線や薬剤の影響を受けやすい。佐古田さんは「流産や胎児の異常が起きるリスクが高まるため、この時期は治療は原則行わない」と話す。

がんの手術も、麻酔による流産を避けるため、安定期とされる妊娠中期(妊娠16週以降)に行うのが基本。乳房を残してがんを切除する乳房温存術では術後の放射線治療が必要だが、胎児の被ばくを避けるため、出産後に実施する。抗がん剤も妊娠中期から、胎児に影響がないことが明らかになっているものを使う。ホルモン剤、分子標的薬は使用を避けるという。

「妊娠中は胎児と母体双方の変化に対応する必要があり」と佐古田さん。同医療センターは、前身の県立加古川病院からの移行時に産科が休診となったため、現在は検査を行った上で乳がんや産科の専門医がいる病院を紹介しているという。「進行がんの場合、子どもの将来に責任を



柴原浩章主任 教授

を減らす方法は研究の途上。ホルモン剤も使用後約2カ月は体内にとどまるため、約3カ月は妊娠を避けるべきとされる。さらに、ホルモン剤は再発防止のため5年間の服用が推奨され、10年間続けた方がいいというデータもある。佐古田さんは「30代で治療を始めれば40代になってしま

乳がん患者会

「あけぼの兵庫」



談笑するあけぼの兵庫の有本幸代さん(左)と川野紀子さん=神戸新聞社

1人で悩まず、体験分かち合う

「どうやって克服してこられたのですか。乳がん患者会「あけぼの兵庫」の会合では毎回、新しい会員から質問が飛び、「まさか自分が」とショックを受けたのは私たちも同じ。治療の相談には乗れなくても、不安に耳を傾け、体験したことを話すのはいくらでもできる」と代表の有本幸代さん(69)、副代表の川野紀子さん(62)は笑みを浮かべる。1979年に発足。毎年、自由に語り合う会「あけぼのハウス」を2月に神戸市長田区、7月に明石市、11月に西宮市で開く。春と秋には、兵庫県立加古川医療センターの佐古田洋子乳腺外科部長ら顧問医5人を招き、治療についての相談会も開催。春の旅行では温泉を借り切り、手術の傷を気にせずに湯治を楽しむ。

患者の心構え

5月の母の日には神戸・三宮で検診受診を呼び掛ける。「ピンクのおそろいのTシャツを着た皆さんは元気で華やかだった」。今年2月に乳房温存による手術を受けた尼崎市の富久保尚美さん(55)は、入会後に初めて参加したとき



富久保尚美さん

(山路 進)

◇次回は1月7日。シリーズのテーマは「がん診療最前線Ⅱ」です。電子版「神戸新聞NEXT」に特集ページがあります。